

発行  
北海道ポーランド文化協会  
〒001-0032  
札幌市北区北32条  
西5丁目2-32-902  
佐光方  
電話・FAX  
011-790-8610

# POLE

第78号 2013.5.10  
北海道ポーランド文化協会会誌

北海道ポーランド  
文化協会  
創立25周年!

Happy 25<sup>th</sup> Anniversary!



ポーランド広報文化センター  
支援事業

第65回例会



Poland Film Selection III

6月8日(土)、9日(日)

札幌プラザ2・5  
(旧東宝プラザ) 狸小路5丁目

## ポーランド映画

セレクションⅢ 開催にあたって

実行委員長 佐光 伸一

6月8日(土)、9日(日)の日程で、「ポーランド映画セレクションⅢ」が開催される。普段はなかなかご覧いただけないポーランド映画の名作・新作を札幌市民に見ていただくという企画は、今年で3回目になる。毎回延べ観客数500人から600人を集め、日本全土でも、例を見ない大規模なポーランド文化を紹介するイベントとなっている。

世界を驚かせたドキュメンタリーの  
問題作、札幌初上映・両監督来場!

マチェイ・ドルィガス監督/ヴィタ・ジェラケヴィチュテ監督



講演会+作品上映  
『統合失調症』  
『私の叫びを聞け』



この映画祭の大きな特徴として、毎回ポーランドの映画人をゲストとして招聘していることが挙げられる。昨年『コヴァルスキー家の歴史』という作品をもって来たゴウエンビェフスキ監督は、札幌でのポーランド映画祭の様子を撮影し、帰国後は、ポーランド国内のマスコミで大きく取り上げられた。

このようにポーランド映画界と札幌市民が直接つながる機会を提供していることが、この映画祭の存在価値だと自負しているが、今年もまた、素晴らしいゲストが札幌にやって来る。

ポーランドのドキュメンタリー映画界を代表する映画作家マチェイ・ドルィガス監督、そしてその妻でリアニアの映像作家ヴィタ・ジェラケヴィチュテ監督

である。EU加盟諸国が自国を代表する映像作品を一堂に集めて上映するEUフィルムデイズが6月に東京で開催され、ドルィガス監督の作品『他人の手紙』(2010)がポーランド代表作に選ばれたのに合わせて監督夫妻が来日することになり、ちょうどわれわれの映画祭と日程が近いことから、ぜひ札幌まで足を延ばし、作品を紹介して欲しいと依頼したところ、快諾してくれた。

今回も、上映後、監督とのディスカッションの場を設けている。お二人とも映画大学で教員を務めているので、きっと面白い話をたくさん聞かせてくれると思う。ぜひ映画を見た疑問や感想をご本人にぶつけて欲しい。

——— 詳細は同封のフライヤーをご参照ください。 ———

=写真上から= ①→1日目 ②→2日目

『統合失調症』①14:20

『私の叫びを聞け』①15:20

『沈黙の声』①17:30

②11:30

『エロイカ』①10:00

②15:30

『愛される方法』①12:00

②17:30

『夏の終わりの日』①19:30

②10:00

<会員用>招待券1枚同封しています。



## 素材を「映像詩」へとまとめ上げていく、

## — ドルィガス監督 —



『私の叫びを聞け』

1991 年 / 46 分 ドキュメンタリー

ドルィガス監督は今回、『他人の手紙』と、監督デビュー作である『私の叫びを聞け』(1991 年)の 2 本を携え来日した。札幌では、『私の叫びを聞け』を上映することにした。彼が国際的な名声を確立することになった代表作であり、映像作家としての彼の個性がもっともよく表れているからである。

『私の叫びを聞け』は、1968 年のポーランドの収穫祭で起こったある事件を題材にしている。当時のアーカイブ映像を見ていたドルィガスは、スタジアムの観客席で人が炎に包まれ、周りの観客がその炎を上着で消そうとしているという異常な光景を発見する。この事件に関する記録はどこにも残されていない。後に分かったのは、リシャルド・シヴィエツという地方出身の会計士の男が、全体主義と世界を支配する嘘に抗議するため、自らにガソリンをかけ、焼身自殺したという事実であった。

歴史の闇に葬られた事件の真相を解明するため、彼は関係者へとインタビューを試みる。彼の妻、今は成人している 5 人の子供たち、友人、そして事件の目撃者の証言を積み重ねていく。そこで現れたのは、何かのイデオロギーの狂信的な信者などではなく、知的で家族を愛するごく普通の男の姿だった。

1968 年というと、ソ連軍が当時のチェコスロヴァキアに軍事介入した「プラハの春」事件や、世界で相次いだ学生運動など、大激動の年であった。歴史に造詣の深かった彼は、抗議行動の必然性を強烈に感じ、焼身自殺へとつながっていく。20 世紀の東欧の歴史では、1969 年ソ連の軍事介入に抗議してプラハのヴァーツラフ広場で自殺したチェコの大学生ヤン・パラブの名が知られている。

彼は、宗教改革のマルチン・ルターと並ぶチェコの英雄として歴史に記憶されている。一方、その

パラブの死の前の年に同じような行為を行ったシヴィエツは、ドルィガス監督がこの作品を製作しなければ、われわれは知る由もなかった。「私が映画を製作することにより、彼の死を無駄にはしなくなかった」とインタビューの中で彼は語っている。

しかし彼は当時の事件の関係者を糾弾する歴史の裁判官のような態度とは無縁である。関係者のインタビュー映像を通し、観客がその事件の意味を自ら考察するよう仕向けていく。ラジオ中継を行っていたアナウンサー、事件を目撃した若い女性、彼らの言葉からは、権力の悪を告発する態度、あるいはその時の自分自身の行為を正当化するといった、一義的なメッセージは聞こえてこない。異常な事件を目撃した時の無力感、当時の記憶に関するとまどいなどが、誠実なことばで語られる。ドルィガス監督は社会問題、歴史事件をテーマとしながら、そこに必ず人間の内面の声を響かせる。アーカイブ映像のモンタージュ、効果的な音楽の使用、関係者のコメントの配置など、卓越した手腕により素材を「映像詩」へとまとめ上げていく。彼の作品に一度触れると、「ポーランドドキュメンタリー派」を代表し、国際的に高い評価を受けるのも容易に理解される。

## マチェイ・ドルィガス監督



1956 年、ポーランドのウッチに生まれる。1981 年全ロシア映画大学を卒業。クシシュトフ・キェシロフスキの助手を務める。現在はウッチ国立映画大学で講師も務める。代表作『私の叫びを聞け』

(1991)、『他人の手紙』(2010)など。

ゲストのトーク & ドキュメンタリー作品  
の上映は<第 1 日目>のみです！

6 月 8 日(土)午後 2 時

ご参集ください

14:00~14:20	監督挨拶
14:20~15:18	『統合失調症』上映
15:20~16:06	『私の叫びを聞け』上映
16:30~17:10	監督夫妻のトーク



今回、ドルイガ  
ス監督とともに来  
札するジェラケヴ  
ィチュテ監督の  
作品からは『統  
合失調症』(2001)を選んだ。

社会主義時代、ソ連では、権力に逆らう政治犯を「統合失調症」と見なし、矯正施設に送っていた。当時、実際に施設に収容されていた人物、そしてその施設で働いていた医師や看護婦のインタビューを通してこの施設の実態に迫るとともに、このようなシステムが生まれることになった背景を考察する。夫妻はお互いの作品にスタッフとして加わっていることから明らかなように、作品にはテーマ的に響き合うものが多い。しかし、作風は異なり、ジェラケヴィチュテ監督は、音楽やモンタージュの利用は控えめで、素材そのものに語らせる。粛々と事実を積み上げていく手法を通して、歴史に対する彼女の誠実さが伝わってくる佳作となっている。

## 歴史に対する誠実さが伝わってくる

— ジェラケヴィチュテ監督 —



『統合失調症』

2001年 / 58分 ドキュメンタリー

ヴィタ・ジェラケヴィチュテ監督

1959年、リトアニアのカウナスに生まれる。全ロシア映画大学、ウッチ国立大学を卒業。代表作に『統合失調症』(2001)、『壁の向こう』(2007)。

## ズバリ見所はココ！

自信を持ってオススメする貴重なポーランド作品群。是非ご堪能ください。

また、今回の映画祭では、昨年、東京で開催された『ポーランド映画祭 2012』で公開された 20 本のポーランド映画史に残る名作から、さらに選りすぐった 5 本をご覧いただく。アンジェイ・ワイダの『地下水道』や『灰とダイヤモンド』のような有名作品はあえて外し、見る機会の少ない作品を選ぶことにした。その中では一番よく知られているのが『パサジェルカ』で有名な鬼才アンジェイ・ムンク監督の『エロイカ』だろう。『地下水道』と同じ第 2 次世界大戦末期のワルシャワ蜂起を扱いながら、まったく異なるアプローチをしている。「英雄交響曲」という副題を持ち、2 部構成となっている。前半は、酒好き女好きのどうしようもないお調子者がすんでのところで、歴史の英雄になりそうになるという物語をドタバタコメディタッチで描いている。後半は一転し、強制収用所から脱走したことになっている英雄が実は屋根裏部屋に隠れていて、今さら出るに出来なくなったという悲喜劇をペースたっぷりに描いている。ワイダの愛国的ロマン主義とは

まったく違った作風で、ポーランドの歴史ものの懐の広さを感じさせる。

さらに、今回の一番の野心的な上映は『サラゴサの写本』である。幻想文学ファンの間でカルト的人気を誇るヤン・ポトツキの幻想小説『サラゴサ手稿』を映像化した作品である。ルイス・ブニュエルやデヴィット・リンチなどが絶賛した作品としても知られる。千夜一夜物語風のストーリーがいくつも重層的に重なり合う、知的で刺激的な作品である。いったん作品の中に入り込めば、3 時間超はあっという間に過ぎてしまうような怪作である。

他にも、戦争で傷ついた男女の浜辺での 1 日を美しい映像で描いた『夏の終わりの日』、ナチスに抵抗する男性を愛した女性を描いたメロドラマの佳作『愛される方法』、巨匠カジミェシュ・クツツ監督の幻の傑作『沈黙の声』どれも見逃せない作品ばかりである。ポーランド映画のクラシックの世界にたっぷり浸っていただきたい。

第65回  
例会報告

## 「ポーランド映画セレクションⅢ」を終えて

実行委員長 佐光伸一

今年で3回目となるポーランド映画セレクションを6月8日(土)、9日(日)の日程で、狸小路の札幌プラザ2・5で開催しました。これまでの2回は、北大学術交流会館が会場でしたが、さらに幅広い客層に会場してほしいとの思いから、大学を飛び出して街の中心部で開催することにしました。

昨年から今年にかけて、ポーランド広報文化センター主催により「ポーランド映画祭 2012」というイベントが、東京、大阪、京都で開かれました。『灰とダイヤモンド』、『水の中のナイフ』など戦後のポーランド映画の傑作をまとめて上映する魅力的な催しです。札幌でもぜひ上映したいと思い、ポーランド映画の巨匠作品の中で、あまり知られていない5本を選びました。『サラゴサの写本』を除き、残りの4本は多かれ少なかれ戦争を背景にした作品です。初夏の週末(よさこいソーラン祭りと同じ日)にテーマが少し暗すぎるかと悩みましたが、ポーランド映画のありのままの姿を、また歴史と対峙するポーランド映画の姿勢に共感を覚えるファンもいるのではとの思いから、あえてこれらの作品を札幌の観客にぶつけることにしました。



舞台挨拶をする  
ドリュイガス監督(右)、  
シエラケヴィチ  
監督(中央)と  
久山宏一氏(左)  
の通訳

また今回の目玉は、ポーランドドキュメンタリー映画界の巨匠、マチェイ・ドリュイガス監督と奥さまのヴィタ・ジェラケヴィチ監督が作品を持って映画祭に参加して下さったことです。監督夫妻の来日を企画したポーランド映画研究の第一人者、久山宏一先生もコーディネーターとして同行して下さいました。両監督の上映会と講演会には、およそ100名のお客様が集まりました。質の高さとテーマのあまりの重さに、会場全体が衝撃を受けている

とが、ひしひしと伝わってきました。ドキュメンタリー映画の上映が札幌での映画祭の恒例になっていますが、3回目にしてドキュメンタリーセクションの質の高さが頂点に達した印象で、はたして今後もこのレベルの企画を続けていけるのかと、責任の重さに押しつぶされそうになる思いでした。

また、ご夫妻から北海道の炭坑跡を視察したいとの依頼があり当協会の霜田副会長のご紹介で、「みかさ・炭鉱の記憶再生塾」の伊佐治知子さんが案内役を引き受けてくれました。労働力として利用された人たちの運命、炭鉱閉鎖後の労働者の消息などについて、両監督は熱心に耳を傾け多くの質問を投げかけていました。今後の創作活動に、この日の記憶が何らかの形で影響を与えるならば、当協会にとって、それに優る喜びはありません。

今回の映画祭は、最終的に延べ400名来場、前々回が600名、前回は500名という観客数を考慮すると、正直、少し寂しい結果となりました。ひとえに実行委員長の私の力不足が原因です。今後、冷静に結果分析をし、次回につなげていきたいと思っています。コメディや恋愛映画などバラエティに富んだラインナップを揃え、ポーランド映画になじみの薄い映画ファンにも来ていただけるようにするか、あるいは逆にドキュメンタリー映画と講演会のみを独立させ、限られた客層を対象に野心的なイベントにするか、今後の方向性について、会員のみなさまや役員の方々としっかりと議論しながら、考えていくつもりです。そのひとつの手段として、映画祭のプログラムでも募集しましたが、「ポーランド映画ファンクラブ」を結成しました。定期的集まり、ポーランド映画の勉強会を開き、今後の構想を練っていく予定です。参加希望者は、佐光(e-mail: ssamitsu@hotmail.com、携帯:090-6447-1700)までご連絡ください。

最後になりましたが、ご来場いただいた皆様、企画に賛同しご援助くださったポーランド広報文化センター、運営に尽力いただいたスタッフのみなさまに深く感謝の意を申し上げます。



## ドルィガス監督との出会い

久山 宏一

### 社会主義ポーランド 4 部作

『私の叫びを聞け』(1991)、『自由の声』(2002)、『ポーランド人民共和国の一日』(2005)、『他人の手紙』(2010)は、アーカイヴ映像を基に社会主義時代のポーランドを描き出した記録映画監督マチェイ・J・ドルィガス(1956～)の4部作。いずれもモノクロ1時間弱の作品だ。

「社会主義ポーランド」連作は、それぞれ異なった方法論で撮られ、「連続」しているというよりは、「断続」していると評するのがふさわしい。本年5～6月に日本で上映された第1作と第4作を例にとろう。『私の叫びを聞け』では、他人が撮影した素材は少ない(変容しながら繰り返し登場するので、尺にすれば、全体の3分の1ほどを占めるかもしれない)。その周辺を新たに撮られた証言映像・再現映像が取り囲んでいる。『他人の手紙』は大半がアーカイヴ映像で、再現映像(検閲官の作業を描いた部分)は10%以下だろう。

米国国防総省の保管フィルムとニュース映像を編集して『東京裁判』(1983)を作り上げた小林正樹は、「膨大な素材を編集しているうちに、自分が演出して撮影したような気がしてきた」と述べたことがあったが、ドルィガスは、アーカイヴ映像に対して、より批評的な距離を保っている。第1作では、細部の拡大、スローモーションなどによって、「他人の映像」を大胆に改変し、第4作では、朗読される手紙への直接的・間接的な挿画として奉仕させるところまで、主体性を奪ってしまった。

### 『世界の夜明けから夕暮れまで』

ポーランドがEU議長国を務めた2011年下半期、ウッチ映画大学などで教鞭を執るポーランド記録映画監督たちが、モスクワ、ミンスク、キエフ、北京、東京の映画大学学生を指導して、「都市の一日」を描く連作が作られた(2012年5月に、北大学術交流会館で開かれた「ポーランド映画セレクションII」では、そのうち、「ミンスク」「キエフ」「東京」篇が上映され

た)。私はひょんなことから、東京篇の制作コーディネーター兼通訳を務めるめぐり合わせとなった。ワークショップの発案者は、ウッチ映画大学教授ミロスワフ・デンビンスキとマチェイ・J・ドルィガス。

日本映画学校・日本映画大学・日本大学の学生たちを指導したのは、初期チェシロフスキ作品のカメラマンだったヤツェク・ペトルイツキ、記録映画監督パヴェウ・ウォジンスキ、ワイド監督の『カティンの森』(2007)の編集者ラファウ・リストパトの3人だった。

『私の叫びを聞け』の作者の面識を得たのは2011年8月、東京でのワークショップ終了後に滞在したワルシャワでのことである。



『私の叫びを聞け』(1991)

こちらの話に熱心に耳を傾ける穏やかな紳士で、気難しい哲学者に違いない、という作品からの予想は快く裏切られた。

同年12月には日本映画大学で、『世界の夜明けから夕暮れまで』全5編+教官の作品4本の上映会が開かれた。マチェイ・ドルィガスとヴィタ・ジェラ



『統合失調症』(2001)

ケ ヴィチュテ(1959～)夫妻も長男アダムとともに日本にやってきた。マチェイ監督の『私の叫びを聞け』とヴィタ監督の『壁の向こう側』も

上映された。

紙幅の関係で、本稿では、リトアニア出身のヴィタ夫人の創作歴について詳述できないが、夫妻の創作はけっして同質ではない。マチェイ監督は、精密なシナリオを準備したうえで撮影・編集に挑むタイプ(最新作では手法を変化させている——後述)。



ロビーで観客の質問に答えるヴィタ監督（左）通訳の佐光実行委員長（中央手前）



ロビーで観客に対応するドルィガス監督（右）通訳の久山先生（中央）

完成度の高いシーケンスを綿密に組み立てた嵌め絵のようなその作品は、有無を言わせぬ説得力を持つ。ヴィタ監督は、より息の長いナレーションを好むようだ。作品の最後には、カメラによって偶然捉えられた「落ち（下げ）」のような場面が据えられていることが多い。疑問符を突き付けられた観客は、己れの脳裏で映画を完結させる。こうした特徴は、夫妻が指導した『世界の夜明けから夕暮れまで』にも明らかだった。マチェイ監督のロシア篇がコラージュ的でやや冷たいのに対し、ヴィタ監督のウクライナ・中国篇は物語的でとても温かい。

……さて、『私の叫びを聞け』が上映された直後のディスカッションで、佐藤忠男学長は「衝撃に言葉も出ない」と語り、天顔大介監督は「人間は死ぬまで人間だということを再確認した」と呟いた。私は、日本のプロの映画人に強い印象を与えたこの作品を、もっと幅広い観客層に観ていただきたいと夢見るようになった。

2012年3月には、東京・岩波ホールで『世界の夜明けから夕暮れまで』が一般公開され、その後、ワルシャワを訪れた私は、ドルィガス監督と再会した。スタジオに案内され、リストパトが編集作業中だった最新作『アブ・ハラズ』（2013）の冒頭シーケンス

を見せてもらった。『他人の手紙』のDVDを受け取ったのもそのときである。

### EU Film Days 2013

EU Film Days 2013 で上映するポーランド作品選定を任されたとき、まず思い浮かんだのが、ドルィガスの「社会主義ポーランド」4 部作の最初と最後の作品を合わせて、102 分のプログラムを組むことだった。夫人の招待も決まった。日本映画大学で、シンポジウム「ポーランド記録映画の世界——ドルィガス夫妻を囲んで」が催されることになり、EU Film Days 2013 との差別化を図るためもあって、プログラムは、マチェイ監督の『私の叫びを聞け』とヴィタ監督の『統合失調症』（2001）に固まった。北海道ポーランド文化協会のご厚意により、札幌「ポーランド映画セレクション III」でも両作品が紹介されることになった。

ウッチ映画大学教授を務めるドルィガス監督は、講演者としても類稀な才能を持つ。東京での計 3 回の上映後には、毎回1時間半に及ぶ質疑応答が交わされた。札幌では、劇場ロビーや懇親会が開かれた居酒屋、さらには移動の車の中でも、議論が続いた。通訳としてこれほど働き甲斐のある日々は稀である。



初日終了後の懇親会風景。ここでも監督たちへの質問が飛び交った。



チセの室内で（左から）藤野、久山、監督夫妻、佐光、氏間、尾形 <敬称略>



ポロチセ（大きい家）の前で  
アイヌ衣装をつけた両監督



ポロトコタンの玄関口  
コタンコロクル像

ご滞在3日目は、白老の「ポロトコタン」を視察。同日、新千歳空港から台湾へ向かわれた。

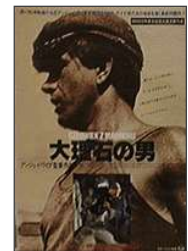
ここでは一つだけ、新千歳空港に向かう車中で、監督が語った『私の叫びを聞け』製作秘話をお伝えしよう——映画中には、ニュース映画カメラマンが写した、燃えるリュシヤルト・シヴィエツを映した7秒間の映像がさまざまに変容して用いられている（初めは周辺の人物たちの反応に焦点が当てられ、ラストで本人が映る）。ところが、映画完成後、監督は、公安局員が撮影した別のフィルムを発見したというのだ。そこには、火を消された後も叫びつづけるシヴィエツが救急車に収容されるまでが記録されていた。しかし、監督は、編集前に「消火」の記録を見る機会を持たなかったことを、特に残念とは感じなかったという。生前のシヴィエツが録音した音声による「遺書」の背景として、燃身の瞬間ほどふさわしいイメージはなかったからである。

この話を聞いて、私の脳裏に、さまざまな疑問が浮かんだ。シヴィエツは、焼身者が即死しないことを計算に入れていたのか？ 救急車の中でも、ミラのように包帯巻きにされていた病院の中でも、力が続く限り叫びつづけたのか？ 何を？ 面会に現れた妻に何を話したのか？ あるいは瀕死の彼は、もはや言葉を絞り出すこともできなかったのか？……と同時に、こうした問いがおよそ無意味であることも理解した。なぜなら、焼身という行為そのものがシヴィエツの叫びだったからである。ドルィガスの映画によって、それは時空を超えて人々に届く——東京と札幌の観客にも。

### 今後への期待

私は、ドルィガス夫妻と同世代に属する。夫妻

は、1980年前後のモスクワ映画大学在学中に知り合って結婚している。私もそのころ、ロシア語とロシア文学に没頭していた。ドルィガスは、ワイダの『大理石の男』(1976)を観たい一心で、ワルシャワに里帰りしたという。私も、1980年に岩波ホールでこの映画に出会っていなければ、ポーランド語の勉強など始めていなかったかもしれない。



『大理石の男』  
カンヌ国際映画祭  
批評家連盟賞

しかし、体制転換後四半世紀近くにドルィガスが成し遂げた業績を鑑みると、同時代人への共感はずっと変わる。坂を登るでも降るでもない、一貫して稜線を歩み続けるような仕事ぶりだ。ソ連の宇宙飛行士にインタビューを行った『無重力状態』(1994)を挟んで、社会主義ポーランド連作で計5つの山頂を制覇した後、『アブ・ハラズ』(2013)で、ポーランドの記録映画が伝統的に得意としてきた「カメラによる観察」手法を試みる。舞台はスーダン、ダムに沈んだ小村の住民の群像劇だ。

今夏、夫妻は、グルジア、モルドヴァ、アルメニアの映画大学学生のためのワークショップを開く。年末には、『世界の夜明けから夕暮れまで』『トビリシ』『キシニョフ』『エレヴァン』篇が観られるはずだ。

その後、「最後の映画」として、「鉄道で世界を旅する」映画を作る。これまでのすべての作品がそうだったように、製作には少なくとも4~5年はかかるだろう。監督引退後は、文筆に専念したい……ドルィガスは、滞日中にそう語っていた。

(くやま・こういち)